

ケインズ『マーシャル伝』とマーシャルの生涯に関する最近の欧米の研究動向*

——とくに R. Coase によるマーシャル出生の研究に関連して——

西 岡 幹 雄

1. はじめに

昨年(1990年)は、マーシャルの『経済学原理』が
公刊されてから、100年目にあたるため、これを祝
う記念学会が各地で挙行された¹⁾。

しかしこうした学会の動きから、一つにまとま
ったマーシャル研究の方向を見いだすことは難しい。
あえていえば、理論・思想・歴史のいずれの視点で
あれ、研究者それぞれが、自らの指針にしたがって、
論究を推し進めている「百家争鳴」の現状である。

そうした最近の傾向のなかで、マーシャルの生涯
を対象にする研究が、際立って広がってきた。この
ような潮流は、1970年代の Whitaker[20][21]に淵
源を発するとはいえ、1980年代後半以降の、主に
「経済学の専門教育者としてのマーシャル」に焦点
をあてた Groenewegen[5][6]、Kadish[7][8]、
Maloney[13]らの業績には、注目すべき点が多い。

そのなかでもとりわけ、マーシャルとその家系に
ついての Coase([3], 1984) ([4], 1990)の論考は、こ
れまで唯一信頼すべきものとして考えられてきた。
ケインズの『マーシャル伝』の内容を、覆すほどの
価値をもっている。

むしろマーシャルの理論の有効性は、彼個人の生
涯を前提にしなくても、失われるものではない。し
かしながら、マーシャルの経済思想の特質を深く理
解しようとする場合、彼の生き方や彼を取巻いた現
実に対する追究は、看過できないであろう。ことに
マーシャルが経済学の中心テーマとしようとした、
労働者の精神的・物的発展という課題を背後から浮
き彫りにするという作業では、彼の経歴についての
究明は、ある程度不可欠である。

この小論では、ケインズの『マーシャル伝』の中

味をコースによる言及から再検証しつつ、それでも
なお彼の論究では不十分な点、あるいはロンドンに
おける筆者の調査にもとづいて、さらに明らかにな
った事実を、略述することにする。

2. 『マーシャル伝』の信憑性とコースの調査研究

聖書の冒頭の一節を思わせる、マーシャルの出生
と彼の家系に関する『マーシャル伝』の書出し([9],
p. 1, 215 ページ)のなかで、コースによれば、事実と
認められるのは、なんとマーシャルの父母、曾祖父
などの名前にすぎない。すなわち、[3]では、(1)マー
シャルの出生地が、ロンドン南郊のクラバムではな
く、テムズ川を挟んでシティの東南対岸パーモンジ
イであったこと。(2)マーシャルの父親、ウィリア
ムのイングランド銀行での地位が、Cashier ではな
く、Clerk であったこと。このような(1)(2)の事実
は、彼の父親あるいは彼自身、語っていた自らの出
身階層が中産階級ではなく、むしろ労働者階級に近
いことを示している。そして彼の出生地パーモンジ
イは、1879年当時、皮革製造による匂いと労働者の
道徳的退廃によって、中産階級の住むはずがない地
域であった。

次にマーシャルの一族について調査した Coase
[4]では、(3)代々「イングランド西部の聖職者の家
柄」という、ケインズによるマーシャル家の記述は
誇張であり、実際、聖職者であったのは、直系では
マーシャルの曾祖父だけであること。(4)『マーシ
ャル伝』では現われなかった祖父、ウィリアムの経
歴について、彼が元来、喜望峰海軍司令部の主計副
総監であったこと。だがその後事業に手を出し失敗、
そのためマーシャル家は一家離散。本人は失意のう
ちにスコットランドで貧死したこと。(5)その影響
で叔父たちはイギリスの外地で活動し、海軍大佐
(Edward)、インド材木商(Henry)、軍医士官
(Thornton)、そしてオーストラリアの牧畜経営者
(Charles)にならざるをえなかったこと。(6)『マー

* 本稿を書くにあたっては、ロンドン大学図書館、
サザーク地方図書館および同館主任司書 Stephen
Humphrey 氏の援助と助言をえた。あらためてお礼
を申し上げたい。

シャル伝』でマーシャルの祖父母の存在が抹消されたのは、彼の父親たちが祖父の死後、祖母方の Bentall 一門の世話になっていた、という事実を隠したいと考えていたことによる。

3. コースの論稿の問題点——マーシャルの出生地 Charlotte Row, Bermondsey の謎

このようなコースの研究は、マーシャルの没後 60 年以上も経って、彼やその夫人、あるいは一族の人々が隠しがっていた²⁾、彼の出身上の真相の暴露を目的としたものではないだろう。この研究からは、労働者に同情的な「福音主義の聖職者」のような『マーシャル伝』のイメージとは、まったく異なったマーシャル像——労働者階級の実態把握や境遇改善という切実な課題は、自らの出身層・地域とは無関係とはいえない構図が、浮かび上がってくる。

しかしながら、シカゴ大学の基金を駆使してなされたコースの論稿には、なお不十分な点がある。

(1)の出生地域は、ロンドン登録所の記録によれば、Bermondsey であり³⁾、コースの調査とは、矛盾しない。しかし肝心の出生地である、66 Charlotte Row は、当時のロンドンのすべての小街路・地区を網羅した、ロンドン市編集『街路リスト』⁴⁾では、Rotherhithe や(これまで彼の出身地といわれた)クラバムにあって、パーモンジイには存在しない。このことは、どのように解釈すべきであろうか。

ロンドン・ブリッジに始まる Borough High Street を真南に行くと、ドーバーとサセックスとに道が別れる、St. George's Church にでる。ここまでの道筋は、ローマ時代から 19 世紀後半に至るまで、シティとヨーロッパ大陸を結ぶ大動脈であり、豊かな商人たちが集住したところでもあった。この大動脈に直結して St. George's Church から出ている Long Lane という道があり、この道は当時の製造業の中心地、パーモンジイに通じていた。

サザーク地方図書館に所蔵されている『救貧税納付台帳』(1842)によれば、マーシャルの父、William は、1842 年 4 月以降 66 Long Lane に来住したことが記されている。実は、Charlotte Row は、ウィリアムが住む付近の Long Lane (1819 年以前)の通称であり (Horwood's Map, 4th ed.)、この通称の方をウィリアムは、マーシャルの出生届にさいして書いたと思われる。したがって、マーシャルが 66 Long Lane で 1842 年 7 月 26 日に、生まれたことはまちがいない⁵⁾。その 66 番地の付近は、『住所録』(1842)

によれば、石炭商、ガラス商、建築業者、医師、弁護士、雑穀商など、独立自営業者が多く、皮革製造業や労働者層は見当らない(むろん Long Lane は、名前どおり、長い通りなので、終点のレザー・マーケット付近には、皮革業者が集住していたことは事実であるが)。

コースが言うように、ヴィクトリア期では、どの地域に生まれたかが、その人の出身階層を表す基準であったことは、真実である。しかしさらに重要なことは、同じ地域であっても、それがどのストリート、プレイスにあるかが、当時の人々の意識構造において、大きな比重をもっていたということである。その意味でマーシャル生誕時の Long Lane は、すぐ西にパリ・ファッションの服飾店や家具店が並ぶ、(コースの見解とは違って)中産階級も住みうる場所であり ([10], § 13), またウィリアムがイングランド銀行に通勤するには、コースの想定したレザー・マーケットよりも便利であった。

しかし、(コースが想定した時期よりは早く)1845 年 12 月までには、マーシャル親子がシデナム⁶⁾に、そして 1850 年 5 月までにはクラバム⁷⁾に移っていることは、確実である。シティの東南 8 マイルほどに位置するシデナムは、この時代、草深い田園風景が広がっていたが、シティに通う実業家や専門職の人々が一戸建の家を求め、住みだした地域であり、またクラバムの場合も事情は同様である。当時の住宅地評価では、クラバムの方がシデナムより上位ではあったが、どちらの地域も(ロンドン北部の丘陵地帯には及ばないとはいえ)、新興中産階級が住むには適したところであった。とくに 1850 年 5 月には、マーシャル家が住みだしたクラバムの Larkhall Lane は、実業家、専門職、公務員、教師などを中心に召使がかならず家にいる街であった。

それではなぜ、ウィリアムはシティに通勤しやすい Long Lane を捨てて、シデナムやクラバムに転居したのであろうか。それは、1840 年代のロンドン近郊の旅客鉄道体系の成立に関係すると思われる。というのは、1839 年にロンドン・ブリッジとクロイドン間の鉄道が完成するが、その区間内にあるシデナムを含め、これを契機に資力ある者は、「混雑のない健康的な環境」をもつケント方面に移住を開始した。そしてクラバムは、1850 年から首都公共事業局によって、公園が整備され、中産階級が住むに似そふさわしい土地になっていった ([18], Chs. 2-3)。

さらに加えて、2つの土地は、非国教徒、メソジストと並んで、福音主義が信徒数においても、組織的にも優勢であった。しかも少年の教育については、新たな中産階級の来住地ということもあって、このほか熱心な土地であったことが、確かめられている([2], Vols. 16-17)。このことは、マーシャルの「福音主義的な」精神形成や教育環境を考えるうえで、無視できないであろう。

他方、マーシャルの生誕地は、付近の工業地帯化と鉄道の開通によって、中産階級にとってもはや「快適な居住地ではなくなり」、こうした人口の移動と交通の発達は、かつての商業繁栄をウエスト・エンドに奪われるに至った。そしてこの地域では、環境のもっとも劣悪な状態が、1860年代~20世紀初頭まで続いた。サルターらの労働党の運動が、ここから始まったのも、ある意味で当然である。([1], § 13)。

このことからマーシャルが自分の出生地を、あえて曖昧にせざるをえなかったのは、コースが言うような、自らの出身階級上の問題よりも、むしろこのように悪化してゆく出生地によって、世間が彼の出身階級を誤解することを恐れたのではないかと推測される。

4. マーシャル家の階級観

(2)のウィリアムのイングランド銀行内での地位について。正貨支払再開、銀行券条令、地方支店設置などを通じて、中央銀行としての自覚をもちはじめたイングランド銀行は、1830年、原則として、「人品卑しからぬ家の子弟」、つまり中産階級の子弟をもって、Clerkの採用条件とし、これを実施した。それより以前、人と組織の近代化を考えていた銀行首脳部は、1821年に重役以外の主要ポストについては、Clerkから選任し、彼らの給与と昇進の形式を定めていた。それによると17歳以上の人を採用し、年功によって昇給と各局の局長・Cashierが決められた。このような採用の階層制、内部昇進制、そして雇用の終身化から、ヴィクトリア時代のイングランド銀行のClerk(一般事務職員)と、それ以上のポストとの間での階級差は認められない(cf.[1], Chs. LI, LVII, LXVII)。

またClerkの社会的教養と威厳を維持するため、銀行内に図書館が設置され、職員の中から多くの文学・歴史・哲学関係の著作者も現われたが、逆に言えば、かなりの人々がイングランド銀行の業務とは

無関係なものに関心を寄せていたともいえる([1], p. 561; [17], p. 7)。ケインズやコースが駄作としたウィリアムの著作もその例外ではないであろう。

1830年に18歳でClerkに登用され、65歳Cashier(出納官)で停年となったウィリアムは、若年の頃は給与が低かったかもしれないが、上記のことから考えて、決して貧しい出自ということではできない(ただ、妻のレベッカとの間には出身上の差があったことは、コースの指摘[3]どおりである)。

これに関連して、(4)の祖父のウィリアムの社会的地位であるが、当時の植民地官僚は、文官・武官を問わず、ジェントリー階級ないしそれに準じる階層から採用することに努めていた(ただし、文官の方が能力・収入も格上とみなされた)([22])から、上級士官でもあったウィリアムの場合、社会階層の点から、その存在を隠す必要は、まったくない。問題は、彼の事業の失敗とそれによる窮迫の死後、祖母方のペントール家(今日でもロンドン近郊において著名な家であるが)に父たちが扶養されたという事実(6)こそ、当時の中産階級の者にとっては、「自立できぬ家族」とみなされ、もっとも触れられたくないことであった。

叔父たちがイギリスを出ていかなければならなかったこと(5)の外地で成功したとはいえ、また無理をして(3)のように「聖職者の家柄」であったと言わなければならなかったことも、中産階級以上の出身でなければならぬ、という鮮烈な「階級意識」と無関係ではなかったことだけはいえる。

以上の筆者による考証は、『マーシャル伝』の内容の疑問に答えるコースの研究について、さらにもう一度、自らの手で確認しようとしたものであった。そこで得た重要な結論は、労働者階級と中産階級との関係は、たんに「階梯的なもの」であり、人的投資によって、「労働者階級そのものが消滅する」というマーシャルの思想⁹⁾と、自らの出生地を曖昧にし、中産階級以下の者だと懸念されるような要素は、すべて改変してしまうマーシャルないしマーシャル家の人々の態度との間の乖離であろう。ブースへの手紙のなかで、[2]が「労働者から経済的倫理的精神的に跳躍させるものの価値」を見失わせないようにして欲しい、というマーシャルの姿勢[15]と、労働者階級に対する中産階級という自らに潜むヴィクトリア時代の伝統的な意識構造との間のギャップ、と言い換えてもよい。

今日、マーシャルとその家の人々が曖昧にしよう

とした、彼の生誕地は、シティとの至近距離という
元来の便利さゆえに、国際情報・金融の街として、
生まれ変わろうとしている。紙数の関係で触れられ
なかった点、なお論ずべき点は残されているが、そ
うしたマーシャルの学説と現実との実相の問題はま
た別稿に譲りたい。

(同志社大学経済学部)

注

- 1) 英(ケンブリッジ2回)、伊(フィレンツェ)での記
念学会の様子については、「国際学会」『経済学史学会年
報』第28号・第29号(1990年・1991年)を参照。
- 2) Cf.[3], p. 522; [9], p. 1, 216 ページ。
- 3) “Alfred Marshall,” Certified Copy of Birth, the
General Register Office, London.
- 4) [12]では、市当局が中世から1912年までの改
廃・新設を含めた、すべての住所・街路を載せるのが原
則である。
- 5) 3月以前の住所はわからないが、ウィリアムはそ
れまでの期間の救貧税を完済しているから、困窮してこ
こに落ち着いたのではなさそうである。
- 6) “Agnes Marshall,” Certified Copy of Birth, the
General Register Office, London.
- 7) “Mabel Luisa Marshall,” Certified Copy of
Birth, the General Register Office, London.
- 8) この主張は、[14]に典型的に現われる。

参考文献

- [1] Acres, W. M., *The Bank of England from
Within*, 2 Vols, London: Oxford University Press,
1931.
- [2] Booth, C., *Life and Labour of the People in
London*, New York: Macmillan, 1903(3rd ed.).
- [3] Coase, R. H., “Alfred Marshall’s Mother and
Father,” *History of Political Economy*, Vol. 16 No. 4
(Winter 1984), pp. 519-27.
- [4] —, “Alfred Marshall’s Family and Ancestry,”
in R. M. Tullberg, ed., *Alfred Marshall in
Retrospect*, (Hants: Edward Elgar, 1990), pp. 9-27.
- [5] Groenewegen, P. D., “Alfred Marshall and
the Establishment of the Cambridge Economic

Tripes,” *History of Political Economy*, Vol. 20 No. 4
(Winter 1988), pp. 627-67.

[6] —, “Teaching Economics at Cambridge at
the Turn of the Century,” *Scottish Journal of Political
Economy*, Vol. 37 No. 1 (February 1990), pp. 40-60.

[7] Kadish, A., *Historians, Economists, and Eco-
nomic History*, London: Routledge, 1989.

[8] —, “University Reform and the ‘Princi-
ples,’” *Conference Paper in Italy* (December 1990).

[9] Keynes, J. M., “Alfred Marshall, 1842-1924,”
in A. C. Pigou, ed., *Memorials of Alfred Marshall*,
(London: Macmillan, 1925), pp. 1-65 (大野忠男訳『人
物評伝』(ケインズ全集第10巻), 東洋経済新報社, 1980
年)。

[10] London Borough of Southwark, *The Story of
the Borough*, 1990.

[11] —, *The Story of the Bermondsey*, 1991.

[12] London County Council, *List of the Streets
and Places*, London: P. S. King, 1912.

[13] Maloney, J., *Marshall, Orthodoxy, and the
Professionalisation of Economics*, Cambridge: Cam-
bridge University Press, 1985.

[14] Marshall, A., “The Future of the Working
Classes,” 1873 ([9]に所収)。

[15] —, *The Letter to C. Booth*, 31 March 1903,
Library of London University (Manuscript).

[16] The Office London Directory, *London Direc-
tory 1842*, London: W. Kelley, 1842.

[17] Sayers, R. S., *The Bank of England*, 2 Vols,
London: Cambridge University Press, 1976 (西川元彦
監訳『イングランド銀行』東洋経済新報社, 1979年)。

[18] Seaman, L. C. B., *Life in Victorian London*,
London: B. T. Batsford, 1973.

[19] St. Mary Magdalen, *Poor Rate 1842*, p. 33.

[20] Whitaker, J. K., “Alfred Marshall: The
Years 1877 to 1885,” *History of Political Economy*,
Vol. 4 No. 1 (Spring 1972), pp. 1-61.

[21] —, *The Early Economic Writings of Alfred
Marshall 1867-1890*, 2 Vols, London: Macmillan,
1975.

[22] 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治』中公新書,
1991年。